



ベンゾジアゼピンの中止に対する態度や困難感

ベンゾジアゼピンは不安や不眠に対して広く使われている薬剤です。しかし、長期服用により依存を形成することがあるため、漫然とした長期服用は推奨されていません。ベンゾジアゼピンの長期処方について繰り返し医薬品医療機器総合機構や学会などが警鐘を鳴らしていますが、いまだベンゾジアゼピンの長期処方は国内外で続いています。この背景として、減薬中止の方法やタイミングが分からないなど処方医が抱える困難感が関係している可能性が示唆されていましたが、これまで調査されていませんでした。

秋田大学大学院医学系研究科精神科学講座の竹島正浩講師、三島和夫教授、琉球大学精神病態医学講座の高江洲義和准教授、聖路加国際大学大学院看護学研究科の青木裕見助教、聖マリアンナ医科大学総合診療内科の家研也准教授、杏林大学医学部精神神経科学教室の渡邊衡一郎教授、坪井貴嗣准教授、北里大学医学部精神科学の稲田健教授、かつもとメンタルクリニックの勝元榮一医師、宗像水光会総合病院の津留英智医師、日本医療福祉生協連合会家庭医療学開発センターの喜瀬守人医師らの共同研究グループは、日本プライマリ・ケア連合学会、全日本病院協会、日本精神神経科診療所協会に所属している医師962名に対してアンケート調査を行い、ベンゾジアゼピン減薬中止困難感に関連する因子を調査しました。

その結果、ほとんどの医師がベンゾジアゼピン中止に対して困難感を有していましたが、精神科医はベンゾジアゼピン中止による離脱症状の出現や精神症状の悪化に対し、非精神科医は中止戦略（減薬方法、減薬開始タイミング）に対してより困難感を有していました。多変量解析ではベンゾジアゼピン中止困難感と心理社会療法に負の関連があることが示されました。本研究より、医師に心理社会療法のトレーニングを行うことによって、ベンゾジアゼピンの中止困難感が減じてベンゾジアゼピンの中止率が向上することにより、ベンゾジアゼピンの長期処方が抑制される可能性が示唆されました。

本研究は、科学雑誌『International Journal of Environmental Research and Public Health』に2022年11月29日に受理されました。

【問い合わせ先】

(研究内容)

秋田大学大学院医学系研究科 精神科学講座
講師 竹島正浩

電話：018-884-1111

Email：m.takeshima@med.akita-u.ac.jp

(その他)

秋田大学医学系研究科・医学部総務課長
飯塚 博幸

電話：018-884-6005 / FAX：018-884-8619

Email：iizuka@jimu.akita-u.ac.jp